

東北支援ツアーに参加して

1964・法卒 長野光孝

未曾有の東日本大震災。最近はメディアの報道もなくなりましたが、大きな建物が流されて吞まれる大津波、街並みが一瞬で瓦礫と化したテレビ映像の衝撃は、今も脳裏に焼きついています。あれから3年8カ月。東北被災地の今を見たいと思って、この東北応援ツアーに応募しました。前日に盛岡市内観光して、ツアーに合流しました。

最初に、民話のふるさと遠野市にあるボランティアセンター「NPO 法人遠野まごころネット」を訪問。元プレハブ工場を改造した建物で、ボランティアが寝起きした大部屋、食堂、洗濯室や隙間だらけのシャワー室を見学しました。大津波で市・町役場が機能麻痺している時、「まごころネット」が駆けつけたボランティアを宿泊させ、被災地や団体にコーディネート。震災から今日まで、延べ8万人ものボランティアが毎日、遠野から被災市町の瓦礫除去等作業にバスで通いました。現在も、数名の方が逗留して支援活動が続けているとのこと。当初出された補助金も現在は無くなり、運営が厳しいとのこと。

釜石では、湾を見下ろす高台で現地ガイドの説明を聞きました。大勢の人が迫る大津波から逃げ、必死に駆け登った丘。見晴らしが良く静かな美しい海が広がり、大津波の修羅極限は想像さえできません。車窓から見る市街に家影はなく、セイタカアワダチソウ草が生い茂っているばかり。丘に近い墓地のおびただしい新石塔群が惨事を物語っています。製鉄工場から立ち上る細い煙に復興のきざしを感じてホッとしました。

その後、車窓見学をしながら大槌町へ。市長や多くの町職員が殉職した廃墟の旧役場はそのまま。多くの犠牲者がでたこの町はどこもかしこも草が生い茂り、宅地造成などの工事らしきものは見あたりません。「ひょっこりひょうたん島」のモデルになったという島影は消え、「吉里吉里国」駅の名だけが残っていました。

宿舎は、二階まで津波に襲われたという大槌町「三陸花ホテルはまぎく」。宿舎での勉強会では、校友鈴木正彦氏から生々しい被災体験を聞きました。家族がバラバラに逃げ延びて再会できたときのうれしさ、仮設住宅の生活が長くなりみんなが疲弊しているが、郷土の復旧を絶対あきらめない、何とかなるとプラス思考で生きている…と、静かな口調の語りで胸が熱くなりました。夕食は「食べる復興支援」。三陸の海の幸、とれたての魚貝と地酒に舌づつみを打ちながら、交流歓談しました。最後に肩を組んで校歌・応援歌を大合唱。

翌朝、早起きしてホテルの周辺を一人で散策しました。家跡は雑草の原野と

化し、復旧工事はほとんど手がつけられていません。大槌湾のご来光に向かって礼拝、慰霊と復興祈念の合掌をしました。

午前は、陸前高田市の旧道の駅「高田松原」を視察。約7万本の青松が1本だけ残して消滅、高田松原海水浴場の白砂7kmも消滅、見わたす限りの枯れた校友会の東北支援ツアーで実に多くを学びました。夏草の原野に立つ奇跡の一本松を見上げて感動。(今は復興のモニュメントとして整備)

石川啄木「頬につたふ なみだのごはず 一握の砂を示しし 人を忘れず」の歌碑の横に立つ、「東日本大震災慰霊碑」に献花し犠牲になられた方々の冥福を祈って全員で合掌。

山肌を削って新しい宅地造成工事とその土を旧市街地に運んでかさ上げするため、数十キロもの校友会の東北支援ツアーで実に多くを学びました。ベルトコンベアが網の目のように張り巡らされているが機械は止まりダンプカーも走っていません。ここも復旧工事が遅れているとのこと。広大な空き地にポツンと建てられたプレハブの「陸前高田復興まちづくり情報館」で津波のパネルを見ながら説明を受けました。旧市街にも人影はなく、宅地跡らしき場所で栽培されている野菜やコスモスが住民の気配を感じさせるのみでした。「後ろを見るな」と5分で避難させ、一人の犠牲者も出さなかった旧気仙中学校の話や、「今も避難生活を余儀なくされているが悩むより動いた方がよい。生きてさえいれば何とかなる。」と、涙を抑えながらマイクを握っているガイドさんの姿が忘れられません。

一泊二日の駆け足ツアーでしたが、大震災・津波の爪痕と復興の今を目の当たりにしました。「アベノミクス」はどこ吹く風、建設業界の人出不足や資材高騰で東北の復旧工事が大停滞していることを実感しました。東北支援は現在も喫緊の国民課題であると改めて認識しました。

旅の最後は、世界遺産・平泉の中尊寺の参拝。校友の平泉町職員の案内で、最初に金色堂の阿弥陀仏を拝観。一味違った歴史文化案内をしてもらい、楽しく有意義な学習ができました。

企画された校友会本部の時代を見る目と先見性に敬意を表します。また、このツアーに同行して案内いただいた岩手県校友会会長菊池宏さんはじめ、岩手校友会の皆さんにはいろいろお世話になりありがとうございました。

この東北支援ツアーで実に多くを学びました。被災された校友への支援をどんな些細なことでもいいから私のできることをしようと思い、手始めに今年の歳暮は校友が扱う東北産物にしました。そして、何年先になるか分かりませんがもう一度、被災各地を訪ね蘇生した町を歩きたいと考えています。

(校友のサッカー元日本代表選手の松井大輔氏からチャリティTシャツとエコバックを参加者全員にいただきました。ツアー記念にします。)